

研究報告：秋田大学保健学専攻紀要22(2)：29 - 36, 2014

大学生の希死念慮・自殺に対する許容度・理解度と 二次元レジリエンス要因尺度得点の比較

佐々木 久 長* 備 前 由紀子**

要 旨

大学生を対象に、希死念慮・許容度・理解度によって二次元レジリエンス要因尺度得点に違いがあるかを明らかにするために質問紙調査を行った。対象は大学生285名（男性174名，61.1%），平均年齢18.6歳であった。

「死んだ方が楽になれる」「死んだ方が家族のためになる」「自殺したいと思った」に全て「無かった」と回答した者は「最近一ヶ月」では89.5%、「今までの人生」では51.2%であった。全て無かったと回答した者を「希死念慮無群」，それ以外を「希死念慮有群」とし，二次元レジリエンス要因尺度得点を比較した。その結果希死念慮有群は有意に二次元レジリエンス要因尺度得点が低かった。獲得的レジリエンス要因の「自己理解」と「他者心理理解」の得点が希死念慮有群で有意に低かったことから，これらをもつ対応によって大学生の自殺念慮を低下させる可能性が示唆された。自殺に対する許容度では若い人，高齢者ともに，また理解度では若い人にのみ資質的レジリエンス要因との関連が推察された。

1. 問題と目的

内閣府の平成26年度版自殺対策白書によると，我が国の自殺者数は平成10年以降14年連続で3万人を超える状態が続いていたが，平成24年に3万人を下回り，平成25年は2万7283人となった。平成24年における年代別の死因順位では，15～39歳の死因で自殺が最も多くなっている¹⁾。内田は1985年度から2005年度までの国立大学生の死因を分析した結果，1996年度から不慮の事故に代わって自殺が死因の第一位となったと報告している²⁾。我が国の全自殺者数に占める大学生の割合は，平成16年は1.3%であったが，平成23～25年は1.7%となっており，全体の自殺者数が減少傾向を示す一方で，大学生の自殺は相対的に増えている³⁾。

大学生の自殺リスクとして，大学（学校）不適応，学業不振，就職困難，長時間作業が指摘されている⁴⁾。しかし，同じような状況にあって全ての学生が同じよ

うに不適応になるわけではない。この個人差を説明するものの一つにレジリエンス（個人の回復力，しなやかさ，柔軟性）という概念がある。

平野は，同じようにストレスフルな体験をしても，大きな精神的打撃を受けてしまう人と，あまり打撃を受けずにすむ人がおり，脆弱性，すなわち「こころの弱さ」を生み出す原因は生得的なもので個人差があり，変化させることの難しさがあるとしている。そして，レジリエンスを「逆境にさらされたり，ストレスフルな状況によって精神の傷つきを受けても，そこから立ち直り，適応していくことができる個人の特性のことである」としている⁵⁾。大学生においても「こころの弱さ」には個人差があり，同じような喪失体験をしても，希死念慮を抱く人と希死念慮を抱かない人がいると考えられる。庄司はレジリエンスには，「大きな脅威や深刻な逆境にさらされていること」と「良好な適応を達成すること」という2つの条件を満たすことが

* 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

** 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻 市立秋田総合病院看護部

Key Words: 希死念慮
レジリエンス
大学生

必要だとされるとしている⁶⁾。何らかの原因で希死念慮が高まるような状況にあっても、危機を乗り越えて自分の考えや行動を変えていくことが可能になることも、庄司によるレジリエンスに必要な条件を満たしていると考えられる。

薄井らは大学生を対象とした調査を行い、希死念慮が高い人ほどレジリエンスが低いことを明らかにし、レジリエンスを高めることは自殺の防御因子になっているとしている⁷⁾。しかし、レジリエンスを高めることは可能なのか、もし可能だとしたらどうやって高めることができるかが問題になる。

平野はレジリエンス研究の中で、個人の回復力を構成するものが資質的なものなのか獲得可能なものなのかに焦点を当て、レジリエンスはパーソナリティであるという視点から、レジリエンスと Cloninger の気質・性格理論 (Temperament and Character Inventory : TCI) との関連を調査している。そして、持って生まれた資質的な性質の強い要因 (気質) と、後天的に身につけていきやすい獲得的な性質の強い要因 (性格) を反映できる二次元レジリエンス要因尺度を作成した。資質的レジリエンス要因として「楽観性：将来に対して不安をもち、肯定的な期待をもって行動できる力」「統御力：もともと不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力」「社交性：もともと見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者との関わりを好み、コミュニケーションを取れる力」「行動力：目標や意欲を、もともとの忍耐力のよって努力して実行できる力」の4因子、獲得的レジリエンス要因として「問題解決志向：状況を改善するために、問題を積極的に解決しようとする意志をもち、解決方法を学ぼうとする力」「自己理解：自分の考えや、自分自身について理解・把握し、自分の特性に合った目標設定や行動ができる力」「他者心理の理解：他者の心理を認知的に理解、もしくは受容する力」の3因子の7因子を下位項目とする「二次元レジリエンス要因尺度」を開発している⁸⁾。その後、双生児法 (一卵性双生児と二卵性双生児を対象に、相関係数を比較し遺伝的影響の検討) を行い、資質的要因は遺伝的要因との関連が高く、獲得的レジリエンス要因は遺伝的要因との関連が低いことを確認した⁹⁾。

自殺の心理的背景には念慮という促進要因だけでなく、「自殺してはいけない」等の抑制要因も関与している。また自殺予防活動の一つとされている傾聴では、希死念慮や自殺念慮を共感的に理解することの必要性が重視されている。そこでは、死にたい気持ちや自殺を考える背景を理解することが求められるが、これら

の関連性を明らかにすることは、自殺リスク評価と自殺予防対策の連携につながると考える。

そこで、本研究ではレジリエンス測定に、資質的・獲得的という視点と7つの下位項目でレジリエンスを測定できる二次元レジリエンス要因尺度を用いて、希死念慮や自殺に対する抑制因子として許容的態度、自殺に対する共感的因子として理解的態度と二次元レジリエンス要因尺度の平均値を比較し、これらの要因間の関連性を検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象者

4年制大学の学生300名を対象に調査を実施し、290名から回答を得た。そのうち欠損値の多かった5名を除いた285名を分析対象とした。対象者は男性174名 (61.1%)、女性111名 (38.9%)、対象の平均年齢は18.6歳であった (表1)。

2. 調査方法

1) 調査方法

2014年5月に、大学の講義時間を利用して無記名自記式質問紙調査を実施し、その場で回収した。

2) 調査内容

(1) 基本的属性

性別、年齢を質問した。

(2) 二次元レジリエンス要因尺度

平野が開発した二次元レジリエンス要因尺度を用いた⁸⁾。これは21問で構成され、「全く当てはまらない」から「よくあてはまる」まで5件法で回答を求めた。資質的要因 (4つの下位項目で構成) は4～60点、獲得的要因 (3つの下位項目で構成) は3～45点、7つの下位項目は各3問で構成され、得点範囲は3～15点となる。

表1 対象の属性

| N = 285 | | | |
|---------|--------|-----|------|
| 項 | 目 | 人数 | % |
| 性別 | 男性 | 174 | 61.1 |
| | 女性 | 111 | 38.9 |
| 年齢 | 18歳 | 162 | 57.2 |
| | 19歳 | 94 | 33.2 |
| | 20～22歳 | 27 | 9.5 |
| | 無回答 | 2 | 0.7 |

(3) 希死念慮

「最近一ヶ月のなかで」と「今までの人生のなかで（最近一ヶ月を除く）」の2つの期間を設定し、それぞれについて「死んだ方が楽になれると思ったこと」「死んだ方が家族のためになると思ったこと」「自殺したいと思ったこと」が、「あった」「少しあった」「無かった」かについて質問した。期間別に、全ての質問に「無かった」と回答した者を「希死念慮無群」、それ以外を「希死念慮有群」とした。自殺念慮は「具体的に時期や方法を考えた」場合に用いることから、今回は希死念慮とした。

(4) 自殺に対する許容度

「自殺することについて、あなたは思いますか」という質問を、自殺に対する許容度として用いた。「絶対してはいけないと思う」「してはいけないと思う」「どちらともいえない」「仕方のないこともある」「しても良いと思う」の5件法で回答を求めた。

(5) 自殺に対する理解度

「自殺することについて、あなたは理解できますか」という質問を、自殺に対する理解度として用いた。「とても理解できる」「ある程度理解できる」「どちらともいえない」「あまり理解

できない」「全く理解できない」まで5件法で回答を求めた。

3) 分析方法

各項目について単純集計を行った後、希死念慮の有無別の二次元レジリエンス要因尺度得点をt検定によって比較した。次に希死念慮の有無と自殺に対する許容度・理解度との関連をカイ2乗検定で調べた。さらに、自殺に対する許容度・理解度と二次元レジリエンス要因尺度得点を一元配置分散分析によって比較した。分析にはSPSS (Ver.19) を用いた。

4) 倫理的配慮

調査への参加は任意であり、参加しないことで不利益が生じることがないこと、データは研究以外に使用しないことを文書と口頭で説明した。回収は研究者が直接関与しないで教室内に場所を設置して行った。

結果と考察

1. 希死念慮を持った経験

「(最近一ヶ月のなかで) 死んだ方が楽になれると思ったこと」に、10名 (3.5%)、「(最近一ヶ月のなかで) 死んだ方が家族のためになると思ったこと」に4名

表2 希死念慮を持った経験

| | | | N = 285 | |
|--------|---------------|-------|---------|------|
| 項 | 目 | | 人数 | % |
| 最近一ヶ月 | 死んだ方が楽になれる | あった | 10 | 3.5 |
| | | 少しあった | 17 | 6.0 |
| | | 無かった | 258 | 90.5 |
| | 死んだ方が家族のためになる | あった | 4 | 1.4 |
| | | 少しあった | 7 | 2.5 |
| | | 無かった | 274 | 96.1 |
| | 自殺したいと思ったこと | あった | 7 | 2.5 |
| | | 少しあった | 7 | 2.5 |
| | | 無かった | 271 | 95.0 |
| 今までの人生 | 死んだ方が楽になれる | あった | 56 | 19.6 |
| | | 少しあった | 62 | 21.8 |
| | | 無かった | 167 | 58.6 |
| | 死んだ方が家族のためになる | あった | 29 | 10.2 |
| | | 少しあった | 19 | 6.7 |
| | | 無かった | 237 | 83.1 |
| | 自殺したいと思ったこと | あった | 43 | 15.1 |
| | | 少しあった | 64 | 22.5 |
| | | 無かった | 178 | 62.4 |

(1.4%)、そして「(最近一ヶ月のなかで) 自殺したいと思ったこと」に7名 (2.5%) が「あった」と回答していた (表2)。

また「(今までの人生のなかで) 死んだ方が楽になると思ったこと」に、56名 (19.6%)、「(今までの人生のなかで) 死んだ方が家族のためになると思ったこと」に29名 (10.2%)、そして「(今までの人生のなかで) 自殺したいと思ったこと」に43名 (15.1%) が「あった」と回答していた (表2)。

これらの質問全てに「無かった」と回答したのは、「最近一ヶ月のなかで」は255名 (89.5%)、「今までの人生のなかで」は146名 (51.2%) であった。

これらの質問全てに「あった」と回答したのは、「最近一ヶ月のなかで」は1名 (0.4%)、「今までの人生のなかで」は21名 (7.4%) であった。

最近一ヶ月のなかでと今までの人生のなかでの希死念慮の有無をクロス集計した所、「今まで・有/最近・有」は29名 (10.2%)、「今まで・無/最近・有」は1名 (0.4%)、「今まで・有/最近・無」は110名 (38.6%)、「今まで・無/最近・無」は145名 (50.8%) であった。

今回の調査では希死念慮を持ったことがない学生は51.2% (今までの人生のなかで) で、約半数は希死念慮を持ったことがあった。従来の調査では「あなたは

これまでに自殺したいと思ったことはありますか」で「ある」が55.2%¹⁰⁾という報告がある。またUPI (University Personality Inventory) の「真剣に自殺を考えた」で15.9%¹¹⁾は、今回の「(今までの人生のなかで) 自殺したいと思ったこと」がある学生の割合とほぼ一致していた。

今までの人生で希死念慮が無かった人の中で、最近一ヶ月の間に希死念慮を持った学生は1名であった。大学生になって初めて希死念慮を持つ学生は少ないことと、過去に希死念慮を持った学生は再度希死念慮を持つ可能性があることが示唆された。

2. 希死念慮の有無と自殺に対する許容度と理解度との関連

「若い人 (同年代)」と「高齢者 (60歳以上の人)」のそれぞれについて「自殺することについて、あなたはどのように思いますか」という質問を行った (表3)。若い人について、「絶対してはいけないと思う」と89名 (31.2%)、「してはいけないと思う」と79名 (27.7%) が回答していた。高齢者について、「絶対してはいけないと思う」と68名 (23.9%)、「してはいけないと思う」と80名 (28.1%) が回答していた。若い人が自殺することについて「しても良いと思う」は11名 (3.9%)、高齢者が自殺することについて「しても良いと

表3 希死念慮の有無と許容度・理解度との関連

| | | | 全体 (n = 285) | | 最近1ヶ月 | | | | 今までの人生 | | | | | |
|-----|--------|-----------|-----------------|------|--------------|------|---------------|------|----------|---------------|------|---------------|------|----------|
| | | | | | 念慮有 (n = 30) | | 念慮無 (n = 255) | | p 値 | 念慮有 (n = 139) | | 念慮無 (n = 146) | | p 値 |
| | | | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | | 人数 | % | 人数 | % | |
| 許容度 | 若者の自殺 | 絶対してはいけない | 89 | 31.2 | 3 | 10.0 | 86 | 33.7 | p = .023 | 24 | 17.3 | 65 | 44.5 | p < .001 |
| | | してはいけない | 79 | 27.7 | 10 | 33.3 | 69 | 27.1 | | 37 | 26.6 | 42 | 28.8 | |
| | | どちらともいえない | 55 | 19.3 | 5 | 16.7 | 50 | 19.6 | | 31 | 22.3 | 24 | 16.4 | |
| | | 仕方ないことも | 51 | 17.9 | 9 | 30.0 | 42 | 16.5 | | 39 | 28.0 | 12 | 8.2 | |
| | | しても良い | 11 | 3.9 | 3 | 10.0 | 8 | 3.1 | | 8 | 5.8 | 3 | 2.1 | |
| | 高齢者の自殺 | 絶対してはいけない | 68 | 23.9 | 2 | 6.7 | 66 | 25.9 | p = .025 | 16 | 11.5 | 52 | 35.6 | p < .001 |
| | | してはいけない | 80 | 28.0 | 9 | 30.0 | 71 | 27.8 | | 38 | 27.3 | 42 | 28.8 | |
| | | どちらともいえない | 70 | 24.6 | 6 | 20.0 | 64 | 25.1 | | 39 | 28.1 | 31 | 21.2 | |
| | | 仕方ないことも | 52 | 18.2 | 9 | 30.0 | 43 | 16.9 | | 34 | 24.5 | 18 | 12.3 | |
| | | しても良い | 15 | 5.3 | 4 | 13.3 | 11 | 4.3 | | 12 | 8.6 | 3 | 2.1 | |
| 理解度 | 若者の自殺 | とても理解できる | 8 | 2.8 | 2 | 6.7 | 6 | 2.4 | p = .060 | 5 | 3.6 | 3 | 2.1 | p < .001 |
| | | ある程度理解できる | 99 | 34.7 | 13 | 43.4 | 86 | 33.7 | | 67 | 48.2 | 32 | 21.9 | |
| | | どちらともいえない | 64 | 22.5 | 10 | 33.3 | 54 | 21.2 | | 31 | 22.3 | 33 | 22.6 | |
| | | あまり理解できない | 75 | 26.3 | 4 | 13.3 | 71 | 27.8 | | 29 | 20.9 | 46 | 31.5 | |
| | | 全く理解できない | 39 | 13.7 | 1 | 3.3 | 38 | 14.9 | | 7 | 5.0 | 32 | 21.9 | |
| | 高齢者の自殺 | とても理解できる | 13 | 4.6 | 2 | 6.7 | 11 | 4.3 | p = .236 | 6 | 4.3 | 7 | 4.8 | p = .004 |
| | | ある程度理解できる | 84 | 29.5 | 12 | 39.9 | 72 | 28.2 | | 54 | 38.9 | 30 | 20.5 | |
| | | どちらともいえない | 91 | 31.9 | 11 | 36.7 | 80 | 31.4 | | 45 | 32.4 | 46 | 31.5 | |
| | | あまり理解できない | 63 | 22.1 | 2 | 6.7 | 61 | 23.9 | | 23 | 16.5 | 40 | 27.4 | |
| | | 全く理解できない | 34 | 11.9 | 3 | 10.0 | 31 | 12.2 | | 11 | 7.9 | 23 | 15.8 | |

思う」は15名 (5.3%) であった。

同じように若い人と高齢者別に、「自殺することについて、あなたは理解できますか」という質問を行った (表3)。若い人が自殺することについて「とても理解できる」と8名 (2.8%), 「ある程度理解できる」と99名 (34.7%) が回答していた。高齢者が自殺することについて「とても理解できる」と13名 (4.6%), 「ある程度理解できる」と84名 (29.5%) が回答していた。若い人について「全く理解できない」は39名 (13.7%), 高齢者について「全く理解できない」は34名 (11.9%) であった。

「最近一ヶ月の中で」の希死念慮の有無とのクロス集計では、許容度との間で有意な関連性がみられ ($p < .05$), 自殺念慮無群は許容的でない回答が多かった。また「今までの人生の中で」の希死念慮の有無とのクロス集計では、許容度 (若い人, 高齢者) と理解度 (若い人) との間で有意な関連性がみられた ($p < .001$)。自殺念慮無群は許容的でなく理解度も低い回答が多かった。

本調査でも、若い人と高齢者について5%前後が自殺に肯定的な回答をしていた。中村は自殺を肯定することについて「死の美化に対する対策を講じる必要がある」が必要だと述べているが¹²⁾, 今回の結果は今後の課題を示唆していると考ええる。

自殺に対する理解では、若い人に対しては40.0%, 高齢者に対しては34.0%が「あまり理解できない・全く理解できない」と回答していた。竹内らは大学生を対象に自殺親和状態尺度を開発したが、その中で「自殺の報道を目にすると、自殺した人の気持ちがよくわ

かる」という質問に「わかる」と回答することが自殺の親和と関連していると指摘している¹³⁾。このことは、理解できないことは個人レベルでは自殺の抑制につながることを示唆しているが、自殺予防対策で目指している死にたい気持ちの理解との関連を今後検討する必要があると考える。

3. 希死念慮の有無と二次元レジリエンス要因尺度の平均値の比較

希死念慮の有無別に二次元レジリエンス要因尺度の各得点を比較した。データの分布、平均値と標準偏差の値を確認しt検定を行った。

最近一ヶ月の希死念慮では、資質的レジリエンス要因 ($p < .001$), 獲得的レジリエンス要因 ($p < .05$) 共に希死念慮無群の得点が高かった。資質的レジリエンス要因の下位項目では、楽観性 ($p < .001$), 統御力 ($p < .05$), 社交性 ($p < .01$) で、獲得的レジリエンス要因の下位項目では、自己理解 ($p < .01$) で希死念慮無群の得点が高かった (表4)。

今までの人生の中での希死念慮では資質的レジリエンス要因 ($p < .01$), 獲得的レジリエンス要因 ($p < .01$) で希死念慮無群の得点が高かった。資質的レジリエンス要因の下位項目では、統御力 ($p < .01$), 社交性 ($p < .01$), 行動力 ($p < .05$) で、獲得的レジリエンス要因の下位項目では自己理解 ($p < .01$), 他者心理理解 ($p < .05$) で希死念慮無群の得点が高かった (表5)。

これらのことから、今後レジリエンスを高めることで希死念慮を低下させる可能性が示された。獲得的レ

表4 最近一ヶ月の希死念慮の有無と二次元レジリエンス要因尺度得点

| | | | 資質的 | (楽観性) | (統御力) | (社交性) | (行動力) | 獲得的 | (問題解決) | (自己理解) | (他者心理理解) |
|------|----------------|------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 希死念慮 | 有 (n = 30) | 平均 | 31.5 | 9.2 | 9.0 | 7.2 | 9.6 | 28.2 | 9.2 | 8.4 | 10.6 |
| | | 標準偏差 | 6.9 | 2.9 | 2.1 | 3.2 | 2.6 | 3.7 | 2.7 | 2.0 | 2.1 |
| | 無 (n = 255) | 平均 | 36.8 | 11.3 | 9.9 | 8.7 | 10.6 | 30.2 | 10.0 | 9.6 | 10.6 |
| | | 標準偏差 | 6.5 | 2.6 | 2.5 | 2.7 | 2.5 | 4.8 | 2.4 | 2.3 | 2.3 |
| | t 値 | | 4.15 | 4.10 | 2.05 | 2.90 | 1.93 | 2.25 | 1.76 | 2.75 | 0.02 |
| | 有意確率 | | $p < .001$ | $p < .001$ | $p = .041$ | $p = .004$ | $p = .055$ | $p = .025$ | $p = .080$ | $p = .006$ | $p = .982$ |

表5 今までの人生における希死念慮の有無と二次元レジリエンス要因尺度得点

| | | | 資質的 | (楽観性) | (統御力) | (社交性) | (行動力) | 獲得的 | (問題解決) | (自己理解) | (他者心理理解) |
|------|----------------|------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 希死念慮 | 有 (n = 139) | 平均 | 34.9 | 10.8 | 9.3 | 8.1 | 10.1 | 29.3 | 9.9 | 9.1 | 10.3 |
| | | 標準偏差 | 7.0 | 2.8 | 2.4 | 3.0 | 2.6 | 4.4 | 2.6 | 2.3 | 2.2 |
| | 無 (n = 146) | 平均 | 37.6 | 11.3 | 10.3 | 9.0 | 10.8 | 30.7 | 10.0 | 9.8 | 10.9 |
| | | 標準偏差 | 6.3 | 2.5 | 2.4 | 2.5 | 2.5 | 4.9 | 2.3 | 2.2 | 2.3 |
| | t 値 | | 3.43 | 1.44 | 3.29 | 2.78 | 2.17 | 2.61 | 0.54 | 2.61 | 2.19 |
| | 有意確率 | | $p = .001$ | $p = .151$ | $p = .001$ | $p = .006$ | $p = .031$ | $p = .009$ | $p = .591$ | $p = .009$ | $p = .029$ |

ジリエンス要因の下位項目では「自己理解」が最近一ヶ月と今までの人生の両方で有意な差があったことから、自己理解を深めることが希死念慮の低下につながると考えた。「他者心理理解」は今までの人生における希死念慮の有無で有意な差が認められた。自殺は孤立や孤独が背景にあると考えられているが、自己理解と他者理解を深めるために必要な身近な人との関係性を意識することで希死念慮を低くする可能性が確認できたと考える。

4. 自殺に対する許容度・理解度と二次元レジリエンス要因尺度の平均値の比較

自殺に対する許容度・理解度と二次元レジリエンス要因尺度との間で一元配置分散分析を行った。許容度は、「絶対してはいけない・してはいけない」「どちらともいえない」「仕方がない・しても良い」の3群に、理解度は「とても理解できる・ある程度理解できる」「どちらともいえない」「あまり理解できない・理解できない」の3群にまとめて分析した。

表6 若い人に対する自殺の許容度・理解度と二次元レジリエンス要因尺度得点

| | | | 資質的 | (楽観性) | (統御力) | (社交性) | (行動力) | 獲得的 | (問題解決) | (自己理解) | (他者心理理解) |
|-----|-------------------------|------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 許容度 | してはいけない (n = 168) | 平均 | 37.2 | 11.3 | 9.9 | 9.1 | 10.7 | 30.5 | 10.2 | 9.5 | 10.8 |
| | | 標準偏差 | 6.2 | 2.3 | 2.4 | 2.5 | 2.4 | 4.9 | 2.3 | 2.3 | 2.2 |
| | どちらとも (n = 55) | 平均 | 36.5 | 11.0 | 10.1 | 8.6 | 10.4 | 29.2 | 9.6 | 9.3 | 10.3 |
| | | 標準偏差 | 6.8 | 2.7 | 2.3 | 2.8 | 2.7 | 4.3 | 2.4 | 2.3 | 2.2 |
| | 仕方がない・してもいい (n = 62) | 平均 | 33.3 | 10.4 | 9.3 | 7.1 | 10.0 | 29.5 | 9.50 | 9.7 | 10.2 |
| | | 標準偏差 | 7.5 | 3.5 | 2.5 | 3.1 | 2.8 | 4.4 | 2.8 | 2.2 | 2.4 |
| 理解度 | 理解できる (n = 107) | F 値 | 8.12 | 2.64 | 1.92 | 12.73 | 1.71 | 2.09 | 2.62 | 0.47 | 2.06 |
| | | 有意確率 | p < .001 | p = .073 | p = .148 | p < .001 | p = .182 | p = .125 | p = .075 | p = .624 | p = .130 |
| | どちらとも (n = 64) | 平均 | 34.5 | 10.7 | 9.3 | 8.0 | 10.1 | 29.9 | 10.0 | 9.4 | 10.5 |
| | | 標準偏差 | 7.2 | 3.0 | 2.6 | 3.2 | 2.8 | 4.9 | 2.8 | 2.5 | 2.5 |
| | 理解できない (n = 114) | 平均 | 37.7 | 11.4 | 10.2 | 9.0 | 10.8 | 30.7 | 10.2 | 9.8 | 10.7 |
| | | 標準偏差 | 6.4 | 2.1 | 2.0 | 2.7 | 2.2 | 4.7 | 2.5 | 2.2 | 2.1 |
| 理解度 | 理解できる (n = 107) | 平均 | 37.1 | 11.2 | 10.1 | 8.9 | 10.7 | 29.8 | 9.8 | 9.4 | 10.6 |
| | | 標準偏差 | 6.2 | 2.6 | 2.4 | 2.4 | 2.5 | 4.5 | 2.1 | 2.1 | 2.2 |
| | どちらとも (n = 64) | F 値 | 5.99 | 1.92 | 4.01 | 3.34 | 2.17 | 0.79 | 0.60 | 0.76 | 0.15 |
| | | 有意確率 | p = .003 | p = .149 | p = .019 | p = .037 | p = .116 | p = .456 | p = .549 | p = .470 | p = .863 |
| | 理解できない (n = 114) | 平均 | 37.1 | 11.2 | 10.1 | 8.9 | 10.7 | 29.8 | 9.8 | 9.4 | 10.6 |
| | | 標準偏差 | 6.2 | 2.6 | 2.4 | 2.4 | 2.5 | 4.5 | 2.1 | 2.1 | 2.2 |

表7 高齢者に対する自殺の許容度・理解度と二次元レジリエンス要因尺度得点

| | | | 資質的 | (楽観性) | (統御力) | (社交性) | (行動力) | 獲得的 | (問題解決) | (自己理解) | (他者心理理解) |
|-----|-------------------------|------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 許容度 | してはいけない (n = 148) | 平均 | 37.1 | 11.1 | 10.0 | 9.0 | 10.7 | 30.2 | 10.1 | 9.3 | 10.8 |
| | | 標準偏差 | 6.3 | 2.4 | 2.5 | 2.4 | 2.4 | 4.9 | 2.2 | 2.2 | 2.2 |
| | どちらとも (n = 70) | 平均 | 36.6 | 11.4 | 9.7 | 8.8 | 10.4 | 29.7 | 9.9 | 9.4 | 10.4 |
| | | 標準偏差 | 6.2 | 2.4 | 2.3 | 2.9 | 2.5 | 4.3 | 2.6 | 2.2 | 2.2 |
| | 仕方がない・してもいい (n = 67) | 平均 | 34.0 | 10.4 | 9.6 | 7.5 | 10.1 | 29.9 | 9.7 | 9.9 | 10.2 |
| | | 標準偏差 | 7.9 | 3.4 | 2.5 | 3.2 | 3.0 | 4.7 | 2.8 | 2.4 | 2.5 |
| 理解度 | 理解できる (n = 97) | F 値 | 4.94 | 2.91 | 0.80 | 7.41 | 1.28 | 0.35 | 0.401 | 1.75 | 1.93 |
| | | 有意確率 | p = .008 | p = .056 | p = .449 | p = .001 | p = .280 | p = .703 | p = .670 | p = .176 | p = .148 |
| | どちらとも (n = 91) | 平均 | 35.3 | 10.7 | 9.5 | 8.5 | 10.2 | 30.8 | 10.4 | 9.8 | 10.7 |
| | | 標準偏差 | 7.5 | 3.0 | 2.5 | 3.3 | 2.9 | 5.4 | 2.8 | 2.5 | 2.6 |
| | 理解できない (n = 97) | 平均 | 36.4 | 11.2 | 9.7 | 8.6 | 10.5 | 29.8 | 9.6 | 9.6 | 10.5 |
| | | 標準偏差 | 6.7 | 2.5 | 2.5 | 2.7 | 2.4 | 4.7 | 2.4 | 2.2 | 2.2 |
| 理解度 | 理解できる (n = 97) | 平均 | 37.0 | 11.2 | 10.2 | 8.6 | 10.7 | 29.5 | 9.8 | 9.1 | 10.5 |
| | | 標準偏差 | 6.0 | 2.5 | 2.3 | 2.3 | 2.3 | 3.8 | 2.1 | 2.0 | 2.0 |
| | どちらとも (n = 91) | F 値 | 1.50 | 1.06 | 1.96 | 0.109 | 1.10 | 2.11 | 2.25 | 1.88 | 0.134 |
| | | 有意確率 | p = .224 | p = .349 | p = .143 | p = .897 | p = .333 | p = .123 | p = .108 | p = .154 | p = .874 |
| | 理解できない (n = 97) | 平均 | 37.0 | 11.2 | 10.2 | 8.6 | 10.7 | 29.5 | 9.8 | 9.1 | 10.5 |
| | | 標準偏差 | 6.0 | 2.5 | 2.3 | 2.3 | 2.3 | 3.8 | 2.1 | 2.0 | 2.0 |

若い人に対しては、許容度において資質的レジリエンス要因 ($p < .001$) とその下位項目である社交性 ($p < .001$) で有意差があった。Tukey の多重比較の結果、「してはいけない」・「どちらともいえない」対して「仕方がない・してもいい」で得点が低かった。理解度については資質的レジリエンス要因 ($p = .003$)、統御力 ($p = .019$)、社交性 ($p = .037$) で有意差があり、多重比較の結果、「理解できる」に対して「どちらとも」「理解できない」で得点が高かった (表 6)。

高齢者に対しては、許容度において資質的レジリエンス要因 ($p = .008$) とその下位項目である社交性 ($p = .001$) で有意差があった。多重比較の結果、「してはいけない」・「どちらともいえない」対して「仕方がない・してもいい」で得点が低かった。理解度について有意差は無かった (表 7)。

自殺に対する許容度では、若い人、高齢者共に資質的レジリエンス要因得点とその下位項目である社交性の得点にのみ有意な差認められた。自殺に対する抑制的な働きかけの効果について今後検討する必要があると考える。自殺に対する理解度では若い人においてのみ資質的レジリエンス要因の得点に有意差があった。このことは同年代である自分と関連づけて理解している可能性が示唆された。

結論と今後の課題

大学生の希死念慮の有無と二次元レジリエンス要因尺度得点を比較したところ、獲得的レジリエンス要因の「自己理解」と「他者心理理解」が希死念慮を低下させることに寄与する可能性が示唆された。自殺を容認する大学生を減らし、他者の死にたいくらい辛い気持ちや楽になりたい気持ちの理解を深めることが期待される。

今回は希死念慮や自殺に対する許容度・理解度と二次元レジリエンス要因尺度間の分析を行ったが、希死念慮には周囲からのサポートや個人の抑うつ度が関連していることが指摘されている。今後はこれらの要因も含めたモデルを検討する必要があると考える。

文 献

- 1) 内閣府：平成26年度版自殺対策白書
- 2) 内田千代子：21年間の調査からみた大学生の自殺の特徴と危険因子 予防への手がかりを探る 精神神経学雑誌 112(6)：543-560, 2010
- 3) 警察庁生活安全局地域課：平成16～25年中における自殺の概要資料
- 4) 国立大学法人保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会自殺問題検討ワーキンググループ：大学生の自殺対策ガイドライン2010
- 5) 平野真理：生得性・後天性からみたレジリエンスの展望。東京大学大学院教育学研究紀要第, 52：411-417, 2012
- 6) 庄司順一：レジリエンスについて。人間福祉学研究, 2(1)：35-4, 2009
- 7) 薄井千恵子, 永田俊明他：レジリエンスと罪責感 希死念慮の予測, 心理臨床学研究, 25(6)：625-635, 2010
- 8) 平野真理：レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み - 二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成, パーソナリティ研究, 19(2)：94-106, 2010
- 9) 平野真理：中高生における二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の妥当性 双生児法による検討 . パーソナリティ研究, 20(1)：50-52, 2011
- 10) 杉岡正典, 若林紀乃：大学生を対象とした自殺予防教育に関する基礎的研究。広島文化学園大学学芸学部紀要(2)：9-15, 2012
- 11) 木下清, 島田修他：大学生の精神健康調査。川崎医療福祉学会誌 7(1)：91-101, 1997
- 12) 中村真：青年の自殺に関する研究 大学生の自殺観と自殺志向との関連性 . 臨床心理学研究 33(3)：18-25, 1996
- 13) 竹内綾, 兒玉憲一：大学生用自殺親和状態尺度の作成の試み, 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 10：73-85, 2011

Suicide ideation, suicide latitude and bidimensional resilience : A cross-sectional study of university students.

Hisanaga SASAKI* Yukiko BIZEN*,**

* Course of Nursing, Graduate School of Health Sciences. Akita University

* * Akita City Hospital, Division of Nursing

This study sought to clarify the differences among such factors as suicide ideation, suicide latitude (permissive and understanding) and the bidimensional resilience scores of university students.

A questionnaire survey was conducted for a group of 285 students (174 men, 61.1%) with an average age 18.6 years old. Three different questions were asked to clarify suicide ideation, “it’s better to die”, “it helps my family if I died”, “I want to kill myself”. As a result, 89.5% of the respondents reported that they had none of these thoughts in the past 30 days, and 51.2% had never had such thoughts in their life. Those who showed no symptoms were classified as the non-suicide ideation group, and those who demonstrated such symptoms were classified as the suicide ideation group. The bidimensional resilience scores for both groups were determined using the Bidimensional Resilience Scale.

The results suggested that the suicide ideation group had significantly lower bidimensional resilience scores. The suicide ideation group had significantly lower scores regarding the factors of “self-understanding” and “understanding others”. These results indicated that suicide ideation among the students may be reduced by increasing the resilience of “self-understanding” and “understanding others”. The relationship between bidimensional resilience and suicide latitude (permissive) towards young and elderly people and latitude (understanding) towards young people was also observed.